

明倫短期大学学会報告

Robin anomaladに伴う言語障害 およびその対策について

伊東節子（教授，歯科衛生士学科）

Robin anomaladに口蓋裂を合併した症例に口蓋形成手術前後を通し，言語機能並びに母親へのケアを行い，さらに6歳時に検査を実施しえた8例に関する言語成績について検討した。その結果，正常言語習得は3例，38%，言語不十分は5例，62%であった。後者は鼻咽腔閉鎖不全を示すIIC型は1例，12%のみであり，他は歪み，置換，省略などの構音障害で，歯音に限局していた。その要因は本症にみられた歯列不正，咬合異常，あるいは乳児期における哺乳障害が考えられた。したがって，本症における言語障害の発生予防にはこれらへの対処を要することが考えられた。

第4回（通算第87回）：2003年7月24日（木）

入学試験と在学中の成績との相関 —本学歯科衛生士学科の場合—

平澤 明美（講師，歯科衛生士学科）

入学後の学生指導に役立てる目的で，平成14年度卒業生64名を対象に，入学試験と在学中の成績の関連を調査した。1. 入学試験と学科試験成績は関連する。ただし，入試小論文試験成績とは関連が少ない。2. 高校評定平均値と学科成績は関連する。ただし，評定平均値にはある程度の学校格差は存在する。3. 入試デッサン成績と臨床実習成績は関連する。との結果となった。今後の学生指導に活用したいが，平成14年よりデッサンの廃止など毎年入学試験形態が変化し，入学試験との継続的な関連を知ることが困難な状況になった。

人を対象とした研究活動の倫理を考える —言語障害領域における脚光と悲劇—

前新 直志（講師，歯科衛生士学科専攻科，
保健言語聴覚学専攻）

診断原生理論（Johnson, 1955）は，かつて国際的認知を受けた吃音発症説（環境要因説）である。Johnsonはこの理論構築のために，10名の吃音ではない孤児に不適切な関わりを行い，意図的に吃音を引き起こす実験を行っていた。公になることはなかったこの実験は62年後の2001年に人権訴訟問題となった。研究は視点を狭めて客観性を追求しなければならない一方で，多くの要因を排除しなければならない。人を対象とした研究はこのことを忘れてはならないだろう。

Washington PostのAP通信で全世界に報じられたこの記事を翻訳・紹介し，人を対象とした研究活動のあり方について提言した。

第5回（通算第88回）：2003年9月25日（木）

教育効果の心理 —ティーチングとコーチングの違い—

山田 隆文（助教授，歯科衛生士学科）

指導や教育は知らない者に知識を教える。しかし，少ない知識でも指導者が指導教育が行えるという利点の裏に，すべてを画一的に見てしまうという欠点がある。個性があり，ある程度，知識や経験を持った学生や患者さんを前にしたときには，この方法が必ずしも効果を奏するとは限らない。それぞれの知識や発達段階に応じて，個別に指導～教育～コーチングへと臨機応変に変化し，適時に最も適切なアドバイスを行うことに効果がある。しかし，コーチングでは，クライアントに依存心を与えてしまうという欠点もあるので，教育者（コーチ）の十分な経験と訓練が必要とされる。

咬合器の再現性

長谷川 成男（教授，歯科技工士学科）

半調整咬合器は，調整可能な平衡側顎路機構と外側真横方向に固定された作業側顎路機構で構成されている。一方，ヒトの作業側顎路は外側のさまざまな方向に向かう。したがって，側方運動時の作業側顎頭点にヒトと咬合器で位置の差（H）が生じる。これを86被験例について解析幾何学的に算出すると，Hは0.02～1.04mm，平均0.33mmとなる。この時，作業側大臼歯での差（S）はHの1/2程度となる。また，Hが0.27mmの被験者の側方咬合位について口腔内と咬合器上での咬合関係の比較をスライドで供覧した。